ヘンリ・ライクロフトと書物

梅　宮　創　造

『ヘンリ・ライクロフトの私記』を読んで、それから暫くして『徒然草』を繙いたら、こんな文章にぶつかった。

「春の暮つかた、のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家の、奥ふかく、木立ものふりて、庭に散りしをれたる花、見過しがたきを、さし入て見れば、南面の格子、皆おろしてさびしげなるに、東に向きて妻戸のよきほどにあきたる、御簾のやぶれより見れば、かたち清げなる男の、年廿ばかりにて、うちとけたれど、心にくゝのどやかなるさまして、机の上に文をくりひろげて見ゐたり。いかなる人なりけん、尋ね聞かまほし。」(第四十三段)

何とも清々しい文章である。「文をくりひろげて見」ている若者はいかにも寛いだ様子で、気持がいい。読書に没頭するその姿が、深い大きな喜びに包まれて一幅の絵のように生きている。読書三昧とはこういうものを斥して云うのだろう。若者の心は身辺の雑事などに囚われていない。春の日の暮れるのも忘れて、専ら書物の世界に遊んでいるように見える。こんな境地にはなかなか達しがたいのが一般であろう。「いかなる人なりけん、尋ね聞かまほし」と興味を唆られるのはひとり作者ばかりではあるまい。

『徒然草』は千三百三十〜三十一年に書かれたというから、ギッシングの随筆『ヘンリ・ライクロフトの私記』とは時代も風土も遠く異なる。ここでは話を読書のことに絞りたいが、『徒然草』の先の引用文に宿る趣などは『私記』の中にもやはり感ぜられ、こちらもまた別の〈一幅の絵〉を見せてくれるところが興味深い。

『ヘンリ・ライクロフトの私記』を我が国にはじめて紹介したのは平田禿木で、これは明治四十年代のことである。平田禿木はギッシングの歿

年（明治三十六年）に偶々英国に滞在していて、そこで『私記』を知ったという。爾来、この作品に寄せる禿木の惚れこみようは相当なもので、或る随筆の中ではこんなふうに語っている。

「最近作ではギッシングの *Private Papers of Henry Ryecroft* などは実に捨て難いものです。私はもうこの一本を始終座右を離したことはありません。聖書のやうにして愛誦してゐます。」（「田園文学」大正三年）

ライクロフト流の生き方に感動した人が、既にもう一人のライクロフトになってしまったかのような口吻である。しかし禿木のこんな気持は判らないでもない。あれだけ英国の風物を讃え、どこまでも英国人の見地から綴られた作品なのに、それでいて『私記』の底辺には洋の東西を越える情趣が一貫して流れている。東洋の読者の胸にもつよく響いて来るものが確かにある。ここで『私記』のとなりに『徒然草』の一節を置いても、あながち乱暴な取合せとは云えまい。

『徒然草』の文章は簡潔そのものである。表現の裏側にくさぐさの詳細を包み隠して、謂わば一を語り十を伝えているような文章である。『私記』の文章もやはり簡潔だが、こちらは『徒然草』よりももっと具体的内容をふんだんに盛り込んでいる。ライクロフトはどこで何を読み、そのとき何を感じたかというところまで具に記してある。

例えば、バラの香の漂う夕べ、ライクロフトは庭の椅子でウォルトンの『フカア伝』を読む（夏三）。眼を上げればフカアの生誕地ヘヴィトリの教会の尖塔が木立のむこうに見えるというわけで、文字通り、書かれたものを肌で感じながら読んでいるのである。フカアは都会の騒然たる環境を離れて、片田舎へ――「神の恵みが大地から湧き出(いず)る」土地へ引込んだ。手にはホラティウス一巻を携えていたというが、こんなところがライクロフトの好みに合っていたと云えそうである。ライクロフトは『フカア伝』に夢中になり、巻末に差掛る頃には満月が東の空に浮ぶというからとんでもない話である。

ライクロフトはまた敷物の上に臥そべって、煖炉の火影の許で詩集を読む（冬二）。「終日雨、されど私には嬉しい一日」――こんなもの静か

な日に注文した本が届くというのも悪くない（春十七）。それからまた、日曜日にはきまってホメロスとかミルトンとかシェイクスピアを開く（夏五）というような話も書いてある。普段の日と違って、日曜の気分にしっくり合う書物があるという。ライクロフトは退職した身だから、毎日が日曜のようなものだけれど、それでも本物の日曜となると周辺の空気がまるで違うそうである。こんなふうに時を選び、書物を選んで読むというのはなかなか風流なものだが、実はこの風流の味こそ『私記』では重要な内容となっていて、作者の苦心のほどもそのあたりにつよく感じられる。ライクロフトの風流生活が以下のような読書三昧に繋がっているところは注目してよい。

……as I read, no interruption can befall me. The note of a linnet, the humming of a bee, these are the sounds about my sanctuary. The page scarce rustles as it turns. (SUMMER V)

ライクロフトは世の厖大な書物の量なぞに煩わされない。読んだものを片端から忘れて行っても構わない。読書を通して賢くならないでも、生活の中身が変らなくても、そんなことはどうだっていいらしい。一刻一刻の充実が何よりも大切だというのである。ライクロフトは没我というものの味を、つまり読書が最も純粋な形をとるときの深い歓びを知っている。――「頁を繰る音さえ殆ど聞こえない」と。

こんなゆとりのある甘美な読書は、昔のライクロフトにはおよそ考えられない。昔は読書の意味あいがまるで違っていた。貧乏生活の真只中で、昼となく夜となく、食欲と読書欲の板ばさみに苦しみながら本を読んでいたものである。本を読むことは即ち飢えを意味していた。それでも思いきって本を買って、その分だけ食を節して、欲望の一方を辛うじて満足させていたというのだ。

本屋の店頭で貧しい男が立読みをしている。或る箇所まで読んで男は立去るのだが、翌日もまたやって来て、前日の続きを読む。そうやって

遂に一巻の書を読み了えたとき、店の主人が堪りかねて、買う気がないのならやめてくれと文句を云う。こんな話をチャールズ・ラムが書いているが（'Detached Thoughts on Books and Reading', *Essays of Elia*）、こういうのは『私記』の一章にもそのまま通じる。貧しい男はどうしても本が読みたいという動物欲望に駆られて、一心不乱に立読みをしていたのだろう。若きライクロフトにも、読書にかけてはこれと似たような烈しい傾向があった。およそ甘美なる読書なぞと云えたものではない。書物はむしろ苦痛につながる代物であったろう。ラムの姉メアリが書いたように、

……and with a sigh
He wish'd he never had been taught to read.

とでも云いたくなる。

『イタリアの旅』に刻されたゲエテの切実な苦しみなども、ライクロフトには痛いほど判るのである。ゲエテはイタリアへの燃ゆる思いに苛まれ、ラテン語の書物が眼の毒だと云ってみんな遠ざけたという。想像力の責苦——torment of imagination が身にこたえたわけである。「我が希いを止めるものは、ただ死あるのみ。」（秋十九）というように、読書が何かしら底知れぬ狂おしい欲望に絡みついていることは、それなりの生活を体験した者でなければ判らない。

ギボンの『ローマ帝国衰亡史』にしても、ハイネ編の『ティブルス詩集』でも、みんな生活を犠牲にして購った書物なのでライクロフトにはいつまでも手離せない。頁の間に過去が折り畳まれていて、それらを開けば、忽ち眼前に在りし日が蘇るのである。ライクロフトは頁に顔を近付けて本の匂いを嗅いでみる。

I know every book of mine by its *scent*, and I have but to put my nose between the pages to be reminded of all sorts of things.

(SPRING XII)

一冊一冊の書物がそれぞれの過去を裡に秘めて生きているということになろう。書かれている内容とは別に、書物は掛替のない生命を、また個性をもってライクロフトの身近に置かれる。ライクロフトはラムに倣って「ぼろをまとった古つわものよ」と書物に呼びかけ、引越で傷んだ本があれば同情を寄せたくなるのである。

昔も今も、ライクロフトはいろんな本を読んでいる。作中から大まかに拾ってみるだけでも、古いところではホメロス、クセノフォン、アプレイウス、ルキアノス、パウサニアス、マルクス・アウレリウス、それからシェイクスピア、ミルトン、ゲエテ、スターン、ジョンソン、十九世紀に至ってはミシュレ、サント・ブーヴ、テニソン、ディケンズ、カーライル、ド・クゥインシ、トロロープ等々の名が見える。更に古典学者のグレーヴィスやグロノヴィウス、また十九世紀エジプト学者のフリンダーズ・ピートリとかマスペロにまで関心が及んでいるところは、自と作者ギッシングの読書の幅を窺わせる。

ギッシングの妻ガブリエルがH•G•ウェルズに宛てた手紙（24 June 1901）でこぼしていることだが、ギッシングは何かと定まらぬ心の持主であったらしい。一定の状況に長く満足していられない人だという。こんな作者の性格の一斑がライクロフトの性格にのり移って、あのデヴォン州の申し分ない生活も、そこでの読書の歓びも、いつ崩れてしまうか知れないような不安が作中にときどき顔を出す。ライクロフトは文学や哲学や歴史など様々な本を読みながら静かな歓びにひたるかと思えば、まるで逆に暗い想念にうち沈むこともある。ここにライクロフトのもう一つの顔が、謂わば近代エピキュリアンの横顔が見えるのだが、こうなるとライクロフトは『徒然草』のあの若者よりも、『アミエルの日記』の作者にずっと似て来るのである。例えばこんな一文がある。

It is the Puritan in my blood, I suppose, which forbids me to

recognise frankly that all I have now to do is to *enjoy*. This is wisdom. (WINTER XVII)

「この過ぎゆくひとときに幸福を覚える。これ以上のものを人は望めまい」(春十七)というような読書の無償の喜びは、ここでは苦々しい反省に転じている。ライクロフトはこんなふうに折々自分を制御し、戒め、理想に向って努めているのである。『アミエルの日記』にも同じような、云うなれば知識人の悩みと努力の跡がありありと窺える。ライクロフトの性格を掘り下げればそんな一面が見えて来て、『私記』の風流の味わいもまた一種複雑なものに感じられるのである。

或る好意的な同時代評によると、『ヘンリ・ライクロフトの私記』は「叡智の書」ということである。「現代に欠けたるは叡智なり、代りに下らぬ空虚な知識や情報ばかりが世に溢れている」(Unsigned Review in *Week's Sunday* , 4 July 1903) と評者は述べている。この評言は間違っていないと思うが、これを敷衍して考えれば、ライクロフトのあのうっとりするような読書の姿も、折々繰返される自己省察も、全て老境に達した知識人の叡智に裏打されていたと云えるかも知れない。

ライクロフトの叡智は知識を得るために読書することの愚を戒めている。とりわけ残された人生のさほど長からんことを思えば、知識の獲得など何の意味もない。「死ぬ前に、もう一遍『ドン・キホーテ』を読もう」(冬十七)と云っているぐらいで、ライクロフトはもう新しい書物に飛びつこうとは思わない。そんなことより何かもっと大切なものがあるらしい。「「昔ほど本を読まなくなった。それよりも考えることのほうが多い」(夏九) と語るあたりに、それらしきものが暗示されているように思う。どうやら沈思黙考の底からゆっくり立上って来るものがあるようだ。

ライクロフトは何の気なしに、昔小学校で読んだ『アナバシス』を取り出して見る。小ぶりのちっぽけな本だが、頁を繰っているうちに、「少年時代の幻が胸内に躍り出た」と云うのである。ライクロフトは改めてクセノフォンの簡潔な文章に感心しながらも、感動はそれだけに止まら

ない。文章のリズムにのって自分の過去が、遠い昔の夏の日射しまでが髣髴と眼に浮んで来るのである。年経るままに心の底に堆積したものが、思いがけず、こんなふうに息を吹き返すわけだ。新しい本ばかりを追いかけて読むのでは、こうはいくまい。ライクロフトは折にふれて過去を想う。否、過去が何かの拍子に鮮やかに蘇るのを凝っと待っていると云うべきかも知れない。過去の重味が実感されている人にとっては、矢鱈に読むよりも考えることのほうが大きな意味をもつというものだろう。

本を無闇に読まないというのは、読むときには〈心の動き〉——mood というものがあるから、それを忘れては不可ないと云い換えてもいい。ライクロフトはいつも自分の心の微妙な動きを大切にして、それに従って書物を選んだり読んだりしているようである。先の『アナバシス』の他に、二十年ぶりに開いたという『トリストラム・シャンディ』なども、読もうとして勇み立って読み出したわけではない。秋の夕暮の散歩がきっかけになったと云うから、人間の心の動きとは妙なものである。しかしこういう理屈に合わない心の動きこそ、ときに読書を促す最も自然な、従って一番強大な力になるのである。散歩の件りを叙した以下の文章にはライクフロフトの精妙な心の動きが読み取れよう。

> Yesterday I was walking at dusk. I came to an old farmhouse; at the garden gate a vehicle stood waiting, and I saw it was our doctor's gig. Having passed, I turned to look back. There was a faint afterglow in the sky beyond the chimneys; a light twinkled at one of the upper windows. I said to myself, "*Tristram Shandy*," and hurried home to plunge into a book…… (AUTUMN II)

生活感情の深いところに繋っていないような読書ほど空々しいものはない。ふわついた教養がいかに空しいか、ライクロフトと書物との付合いはそのあたりを充分に示してくれる。ライクロフトの帰って行くところは明らかである。これまで生きて来た自分というものがまず根本にあ

る。昔は散々辛い思いをして、窮乏生活の果てに古代の国々の爽やかな夢を結んで日を送った。今では生活状況が好転したけれども、そうかと云って昔のことを忘れるわけにいかない。書物が食物と同様に、或はそれ以上に欠かせないものだったあの厳粛な日々は忘れようにも忘れられないのだ。ライクロフトの思いはそんなところへ舞い戻る。そこは彼の心の古里である。デヴォン州の自然に包まれ、四季折々の風物に接しながら、ライクロフトはこの動かしようのない心の古里を実感している。

それからもう一つ。古代の文学は青春の夢を懐しく思い起こさせてくれるものの、異国の言葉は所詮異国の代物で、ライクロフトの耳に遠くで鳴る音のように響く。それよりももっと身近に感じられるものがある。母国の生んだ詩人シェイクスピアがそれだという。

> Among the many reasons which make me glad to have been born in England, one of the first is that I read Shakespeare in my mother tongue. (SUMMER XXVII)

ライクロフトはもはや徒らに拡散して行く傾向を嫌って、確実なものを握り、どこまでも深まってゆこうとする。「シェイクスピアと英国は要するに一つのものだ」と断ずる言葉の背後には、自国の文化とか、自分の精神の拠り所を凝視する眼が感じられる。ライクロフトは結局、我が心の深淵に向ってひたすら降りて行くのだろう。

『ヘンリ・ライクロフトの私記』は決して生温かい詩情にくるまれた作品ではない。作者の夢や後悔や内省がライクロフトの静穏な日々に暗い影を落しているのは見逃せない。ただそれはそれとして、ときとして雲間からこぼれる明るい陽光のごとく、ライクロフトの生活の処々に〈一幅の絵〉の極立つときがある。作者ギッシングの想像の賜物と云うべきで、何よりも読者の胸に残るのはこの〈一幅の絵〉の印象であろう。ギッシングはこれを十五年ばかり温めて来て、積年の夢を紙面に刻み込むように作品を書いた。ライクロフトの生活は作者ギッシングの夢の結晶

なのである。ギッシング自身の現実生活となれば、これは絵になるどころではなかった。H•G•ウェルズがギッシングの墓碑に銘したように、「先天的、或は後天的なものなのか、とにかくその生涯は悲劇であった。」

或る朝、ライクロフトが本を読んでいると、周りがいやに森閑として不思議な思いに打たれる。窓外には鉛色の憂鬱な空が低く垂れこめて、いかにも寒々しい。午後、散歩に出たら、何やら白く軽いものがライクロフトの眼の前を過る。

> ...something white fell softly across my vision. A few minutes more, and all was hidden with a descending veil of silent snow. (WINTER XXIII)

降りしきる雪の中でライクロフトは人生の最期の夢を見ていたのかも知れない。そんなことを思わせる見事な文章である。作者ギッシングの悲劇の生涯も、このしんしんと降る雪に清められ白一色と化し、——遂に『私記』完結後三年にして幕を閉じたのである。